

霧と雨。

鬱蒼たる樹木の濃い緑が斜面に段を成して生き生きと籠もり盛り上がり、雲霞のようであった。白く風景を幻想的に消しながら棚引く霧が、それらと引き違ふことで、甚だ和風な趣を醸し、色彩のある水墨画をなす。

土は去年の落ち葉や小枝と溶け合っていた。踏み締めると柔らかい。

山深い古い径を歩いていた。森はたつぷり水を含む。空気には、岩迸るの狭流のような清々しさがあつた。

木々が噴き出す芳香を吸う。疲れが解れた。身を軽く感じる。細胞が甦り、すべてが新鮮になった。さわやかだ。あゝ、しかし、こんなに満たされていながらも、人は考えなくともよい想いを抱くものである。どうして、ここへ来たのだろうか、と。

その時は、わからなかった。だが、今はわかる。解答は初めから出ていた。

水の落下する音が鑿々と響く。少し前から、音だけがあつた。

小さく開けた場所に出ると、水冷の風が頬に当たる。透明な淵だった。水底の磐が明晰だ。イワナとそのくつきりした影がさつと横切る。

小さな瀧から落ちて、あふれた水は岩間を九十九折になって往く。小さな急流へと繋がっていた。その先を眼で追えば、霧と雨とに煙る麓が見える。竹林がさわさわと揺らいでいた。

こうべを戻す。小さく清らかな「瀑布」。

傍らの垂直な崖は、さほど高くなく、窪んでいた。縄文人の（又は縄文時代の）祭祀の跡とも言われている。

瓦筥（かわらけ。素焼きの土器の平盃）のようなものを手に取る。缺のある茶碗もあつた。大した遺物でもないだろう。でも、しみじみと感じるものがあつた。

瓦筥は平安時代のものか、茶碗は江戸か。碗は李朝のものであることが、あとでわかった。高麗青磁の末裔で、日用品として量産され、しかも青くならなかった下手物で（侘び茶に於いては愛玩された）、時代は室町かもしれない。

だが、僕はその時、自然を眺めていた。荒く尖った濡れ石や、厳肅なる大巖、瑞々しい緑葉の先から垂れる雨の雫と、きよらかな水とを。坐って、暫くぼんやりしていた。

第一章 「八つになりし年……」

「真実を究めたい。事実を究めたい。存在を究めたい。現実を究めたい。生きるを究めたい。

それは人間存在というベクトルに仕組まれたシステムであり、いずれも皆同じことを要求している」

そんなことを考えていた。

その何かを、知りたい、つかみたい、透徹したい、そう思うものだ。

人は生まれながらに知ることを欲する言ったのはアリストテレスだった。ふつと思う。脳神経細胞が自動的にインパルスを発し、廻った。アリストテレスからヘーゲルを想起し、ヘーゲルの弁証法を思う刹那、脳裏に忽然と或る思考が浮かび、或る理解を構成する。それは次のようなものであった。

生命は弁証法的に進化する、生命は止揚する、つまり、このベクトルは自己超越のベクトルである、と。

又、そういう思考の過程を照覧した。

思考というものを、本当に自分は自分で編み出しているであろうか。自然現象のように湧いて、自然現象のように理解や納得などと呼ばれる心的現象を起こしていないであろうか。概念をなぜ持っているのか。それらの意味がなぜ意味を成すのか、どういうふうに意味を成しているのかを我々は知っているであろうか。経験を直観（直截観察）のままに認知すれば、とてもそうとは感じられなかった。

海面の温度が上がって海の水分が蒸発し、雲を成すようなものではないか。水と二酸化炭素と太陽光で光合成を起こすのと何が違うか。そうだとしたら、そもそもこんな批判自体が路傍の石ではないか。

天易家本家の当主である天易真隨之丞あまやす しんずいのすけざえもん左衛門の曾孫、天易真兮まことやは田舎の古寂れた喫茶店でキャラバッシュ・パイプを吹かしながら、そんなことをぼんやりと考えていた。

概念や論理を使う思考を批判することは、論理の約束上の矛盾を生じ（飽くまで、約束上の矛盾なので、論理に頼らなければよいのだが、そんな思考は存在しない。又、論理が批判対象なので、約束も留保扱いとすべきであろう。だが、その根拠は約束に依拠しているので、もはや、「……」である。ちなみに、約束とは、「検証されていない手法・素材による証明は証明にならない」という約束）、二律背反を生じさせる。

八つの頃を思い出した。

その歳で、原始仏教の典籍を読んでいたので、同年の友人からよく揶揄された。

「何、それ。ばかじゃない？」

そのクラスメイトは利発で体が大きくて、元気な子だった。年の割に、無知じゃない。真分は弱々しく応えた。

「スッタニパータというんだ。智慧の本だよ、健太くん。とても役に立つ（はずだ）」

「役に立つ？ 何が書いてあるんだ？」

「……執著を棄てる、つてことかな。それが正しいことだつて」

「はあ？」

「ええっと、あの、それから、前に、お坊さんが言っていたんだけど、釈迦牟尼は無空を説いているつて」

「ふん」

「でも、今読んでも、そんなの、余り書いてないけど」

「あのさー。」

この世が無、つていうやつか。知ってるよ、伯父さんが坊主だから。あほらしい。現実見ろよ。どこが無だよ。そんなの、恠巧ぶったエラそうなやつらがする、頭でつかちな話さ。じゃ、今、俺が殴ったら、それを無だつて言えるか？」

あゝ、わかってないな。口には出さないけど、そう思った。現実じゃない、つて？ あゝ、確かに大概の人はそう思うだろうな。でも、そんなことじゃないんだよ。だいたい、人間の智慧を超越したところで釈迦は話してるんだから、無空も無空じゃないんだよ。

どうして大概の人間つて、こんなふうなんだろう？

そう思ったものである。そのときのことを思い出すたびに、真分は吉田兼好の『徒然草』の最終段を想い出すのであった。「八つになりし年、父に問ひていはく、『仏はいかなるものにか候ふらん』と言ふ。父がいはく、『仏には人のなりたるなり』と。また問ふ、『人は何として仏にはなり候ふやらん』と。……」

兼好の父のような一般的な説明（父「仏のをしへによりてなるなり」、兼好「その教へはじめ候ひける第一の仏は、いかなる仏にか候ひける」）による限りは、辣韭の皮のように、剥いても剥いても終わらない。解決不能に陥る。

窓の外を見た。

小雨だろうか、翳りが少し深くなる。アスファルトの色がまだらに濃くなった。向かいの古書肆ひらえ たかしに平衡隆臥が入るのが見える。眞神眞義塾大学附属の眞神高等学校の外部講師を引き受けたと聞い

ているが、大丈夫だろうか。講義の草稿は出来たのだろうか。試験問題まで作ると言っていたが、そんなことがあるのだろうか。

いつも同じトレーナーにデニムのパンツにバスケットシューズ、Tシャツ2、3枚。冬はトレーナーが目の粗い重いセーターになって、毛糸の帽子が加わるくらい。無精ひげで、心此処に在らずのまなざし。（風体では真分も人のことを言えた義理ではないが）あれでもまともにやっているのかどうか……慮らずにいらなかった。

などと思いつつも、オブリガートのように次のようなことを考えている。

人は凡ての人を心配することはできない。無際限にあるこの世の凄まじい不幸の凡てを身内の苦しみのように苦しんだならば、精神は崩壊するであろう。人が他人に無関心なのは、理に適っている。だが、それとて自分で考えた上で実践していることではない。本能的に備わっているものだ。光合成と変わらない。思惟そのものがオブリガートのようなものか、いや、装飾音ですらないであろう。

事実、思惟というものは、実際に起こっている事象としては、脳神経細胞に起因する化学的な、電氣的発火現象でしかない。

「いったい、小生は、今、何を言っていることになっているのか。誰にもわからぬが、誰も彼もが（人間以外、いや、生物以外の者たちも）既にわかっていることなのだ」

第二章 「求めよ、さらば得られん」

天易真分が心配していた時刻と同じ頃、皺々トレーナーの彼は真分の身なりなどを想い泛べていた。

上から言えば、まず頭には黒くて尖ったつばの広いウィザードハットをかぶり（しかし、帽子の山は途中で折れて斃れている）、長い髪は尻まで届き、細い驚鼻に片眼鏡をかけ、顎鬚なのか頬鬚なのか口髭なのかもう区別のつかないヒゲが臍下まで伸び、サテン地のシャツの上に、膝下まであるロココ調の青いパステルカラーのサテン地の儀礼用ミリタリーコートを着て、コートには金糸の房飾りや紐飾りが奢られ、レースの飾られた大きなカフス、マッチ棒のような脚に穿く一六オンスのデニムのスキニーパンツは破れ、弛んだ蛇皮のロングブーツを履いている。

「大概の人は、真分くんを見ると、眉を上げるか、顰めるかするが、どうやら、彼はそれが楽しいらしい」

崇敬する一つ上の先輩のことを考え、思わずにやにやしてしまふ。おっと、余計怪しまれちゃうな。そうでなくとも職質受けること多いのに……。そう思うと、亦た余計にニヤニヤしてしまふ。だが、そのとき。

隆臥は黒い夜会服に黒いシルクのマントを引きずりながら、古書肆に入る奇妙な人物に気がついた。

入る刹那に見えた横顔が、なぜかとても妖しく思えた。

美しくもあるが、底知れない。北欧人のような眼鼻のシルエット。双眸は眼窩に濃密な色彩を湛え、蛇のように無表情で、人らしさのない、人知の及ばない古代の神のようであった。

長い髪はマントに波打つ瀧のようで、黒に近いほどに濃い緋色であった。赤と黒か。生と死。黒い闘牛の背から流れる血。

無意識にそう思った。思いながらも、古書肆に入っている自分に気がつく。いやいや、まんざら無意味なことではない。（異例なことだが）僕は哲学の試験問題を作らなければならないこととなった。だから、古書を廻るのも悪くない。

今までも、ぶらりと入った書店の、たまたま見上げた棚に、探していたものがあつた、なんていう類のことがよくあつた。求めよ、さらば得られん、とは、まさしく真理である。隆臥はそう思う。

「恐らく僕は凡てを既に知っているんだ。宇宙の凡て、その過去未来の凡てを。そうでなければ予知夢などというものが有り得るはずはない。顕在意識の奥底に隠された意識の大海の中に無限のアーカイブがあつて凡てを知っているに違いない。

そうでなければ、生き物が食べられるものを先天的に知っていたり、鮭や渡り鳥が同じ場所に戻ったりする智慧の説明がつかない。

花が蜜蜂に花粉を運ばせることや、樹木が実を鳥獣に食べさせて種を遠くに運ばせることや、擬態などの様々な進化も、生命の奥底に万象を知る意識があるからこそ可能だとも思えてくる。

ただ、あれだよな、予知夢の場合は違う解釈もあり得る。

つまり、時間というものは不可逆的なものとして理解されているけど、実は脳内で系列にしているだけで、時間意識を超越した視点から見れば、同時に起こっている（時間を超越しているのだから同時ですらないが）のかもしれない」

などと半ばオートマティックに思考しながらも、黒い人物を無意識的に眼で追っていた。眼で追いながら、ふっと眼についた本は、ダーウィンの進化論だった。購入する。ツイードを着てパイプをくわえた書肆のおじさんは本を古新聞紙で包んでくれた。

会計が終わって外に出ると、もう黒い人の姿は見えない。

学校が用意してくれた寮に帰った。眞神高校は幼稚園小学校中学校とともに眞神大学の広大な敷地内にあり、職員寮もその中にある。

包みを解いて本を愛玩するように眺めた。書物の持つ匂いも好きだ。日に焼けた色合いも間接照明のようにナチュラルで、かつ癒しを感じさせ、温かみがあり、優しい。

だが、それを堪能したのは、いつになく短い時間だった。包んでいた新聞紙の記事が気になったのである。

それはフランスの試験に関する記事であった。

フランスでは大学に進むための、日本で言うところの大学受験（大学入試センター試験）は、高校卒業資格試験とも言うべき、バカロレア（受かればどの大学にも入学できる）だが、制度以外にも日本とは大いに違う点がある。

例えば哲学の試験だ。バカロレアでは4時間という試験時間で、1問のみの問題を論述する。

2014年にフランスの高校生が論じさせられたバカロレアの問題には、『我々は幸せになるために生きているのか？』『自由であるためには、選択肢があるだけで十分か？』『芸術家はその作品の主人と言えるか？』などがある。

しかし、記事によれば、

【今年4月のENS（超エリート校）の設問は凄かった。

ただ一言、『Expliquer』である。ちなみに『Expliquer』とは、『説明する』という不定形の単語だ。

いったい、何を説明するのか？しかし、目的語はない。受験生の嘆きと呪詛が聞こえるようだ。

実際、試験終了後のツイッターなどSNSでは、受験生の悲鳴にも近いつぶやきであふれたらしい。

『説明って、何を？』と。

しかも、『計算機の使用は禁止する』という注意書きまであり、受験生をさらに混乱させたのである。

いったい、この問題のどこに計算機が必要なのか。必要なのに、なぜ注釈がついているのか。ちなみにこの1問に与えられた時間は6時間であった】

隆臥は感嘆した。

「あゝ、素晴らしいな、フランスは。

何という崇高な国なのだろうか。哲学が重んじられている。

それに比して、我ら東洋では、実利主義ばかりだ。基礎科学も実利のために求められているに過ぎない」

何かを思いつき、思案し始める。思慮を重ね、一つの問題を作り上げた。その一枚の紙を見つめ、満足げに吐息する。深く頷きながら言ったものだ。

「求めよ、さらば得られん」

第三章 “リセ（仏：Lycée）” 又は“リュケイオン（希：Λύκειον）”

眞神眞義塾大學（眞神大学）へ進学するための準備クラスが附属眞神高等学校内にあり、それを通称“リセ（仏：Lycée 日本的高等学校に相当）”と言うのは、フランス共和国で、グランゼコール（仏：Grandes écoles）への進学準備クラス、CPGE（グランゼコール準備級：Classes préparatoires aux grandes écoles）がリセの中にあることから、いつ誰ともなく、眞神高校の学生の間で、そう言い慣わされるようになったものである。

だから、本来の意味を考えれば、準備クラス『大學希望』は“CPGE”と呼ばれるべきであった。それが通称の妙というもののなのである。変なずれが楽しかったり粹だったりするのであった。なお、スノッブな連中がときどき“リセ”のことを“リュケイオン”と言うのは、アリストテレスが創ったリュケイオン（希：Λύκειον）という学園がリセの名の由来であることを知っているということをひけらかすためである。

罫^{あかし}は寄宿舎の自室ベッドに横たわり、両手を後頭部に当て天井を見ながら、虚茫な表情をしていた。彼の属する天平家は眞神地方の眞神族の中では高貴な家柄で、古来文官である。変人の多い血筋だが、倭民族とは一線を画す名前をつけたがるこの民族の中にあって、彼の名は比較的“倭びた”名であった。

隣室から遊びに来て、実家から送られた季節外れのリンゴを齧りながら、理愈^{りゆうほん}汎は、

「何か、おまえ、最近、元気ないねー」

「そうか」

「そうだよ」

「かもな」

「試験勉強してるか？」

「いや」

「おい、いくら成績いいからって、ここのは半端じゃない……ま、そんなこたあ、もうよくわかってるよな、お互い」

「あゝ」

入ることも大いに難儀ではあったが、『大學希望』に入ってから、寮制のため、逃げ場のない寄宿舎生活になり、毎週のテストと毎日の課題で、勉強しない日々となるのであった。テストの点数が悪いと、即刻、普通クラスに戻されるため、二年半の間、無我夢中、太陽を見る日がないとまで言われている。

「去年、選考試験受けるまでは入ることしか考えなかったけど、入ってからこの八か月余り、大変さはちつとも変わらないな」

「そうだな」

「じゃ、試験問題盗むつてのはどうだ」

「バカバカしい。試験の意味がない。第一、どうやって盗む。教務室の耐火金庫の中だ。鍵は管理職しか持っていない。教務主任ですら持っていない」

「へへー。やけに詳しいじゃんか。お前も一度は考えたな」

「純粹な楽しみとしてだ。思考機械のようなものさ。論理も実践と乖離し過ぎれば、無味かつ乾燥だ」

思考機械と呼ばれたオーガスタス・S・F・X・ヴァン・ドゥーゼン教授は、ジャック・フットレルが創造した科学者探偵だ。「思考能力は全てを支配できる」と主張する思考機械はそれを証明するために刑務所の監房から脱出してみせると言い、約束の期日までに鮮やかに脱獄する。

ちなみにフットレルはあの豪華客船タイタニック号の事故で世を去った。

理愈汎はその探偵も推理小説も知らないので、話を逸らす。

「あ、そう言えば、今年は、ゆれあ 喻咽亜も受けるらしいぜ」

罅は薄笑いをした。定期試験の話から「リセ」への編入試験へと話題が移ったからだ。

しかし、想いは又、ゆれあ 喻咽亜へと移って行った。一学年下の、彼女は今年生だ。試験を受ける機会は、（通常は）一年生のときのみであった。今頃（六月）から九月まで、数回に亘って行われる。

試験に受かった者は一年生の十月から、「リセ」に編入になるのであった。

罅は美しいゆかり 喻咽亜を思い浮かべている。特に意図もなく、想いが追っていた。自分とは何の縁もえん 因もあり得ない知的な美少女。白く輝き、澄み切って凜とした、意志の強いまなざしの人。同じ天平家でありながらも。

「しかも、聞くところによるとよ、妹の伊咽亜も受けるらしいぜ」

利発で、くるとよく動く（光が頻繁に移ろうので、そういうふうに見えるのだ）、生き生きとした双眸で、いつも悪戯っぽく相手を見つめる、まばゆい少女。ゆかり 喻咽亜の二つ下だから、まだ中

学二年生のはずだ。

「今日も試験のはずだ。伊呷亜が受かって、喩呷亜が落ちたら、面白いな」

眞神の中学高校大学の間は飛び級が認められていて、中学から高校一年に上がった場合、同時に“リセ”への編入試験の受験資格も得られるので、一括受験することも可能だが、とても難関である。なお、中学生が高校に来る場合は、残っている中学生の勉強は高校の勉強と並行して行うことと決められていた。

「そう思わないか」

理愈汎は相変わらず無責任なことを言う。相手に別に恨みも悪意もなかった。ただのおかしがりたがり屋なのである。

「ふ」

それを思っ、罽は鼻で嘲笑う。だが、どうでもよかった。最近ずっと、そういう気分なのである。何かを求めているが、何を求めているかわからない、よくあるそういう欲求不満であった。くだらないことだとは自分でも思っている。

「茶店でも行かないか」

罽は言った。

「そうか、気分転換か」

意外に人の心を見透かす理愈汎が言う。

武骨で下層な武門の家、贅家いぜいけの血がそうさせるのか。

家柄や血筋で個々の人間の個性が決まるなどという考えは、古臭く、非現実的・非科学的で真実から乖離し、罽の思想に反するが、それゆえに逆に、ゲーム的感觉で彼はそれを楽しんだ。

寄宿舎にも、天井高く、高窓があり、ゴシック建築のカテドラルのような厳かな食堂があるが、敢えて敷地内を歩き、大図書館に向かった。

そこは小中高大学の学生が共通で使うのみならず、一般にも公開されているので、レストランや喫茶をいくつか備え、街の雰囲気が少しある。ベネチアの老舗喫茶店を模した作りの喫茶『クラシコ』に入ったが、ほとんど客はなく、ただ天之喪令もれいがいた。

さっそく理愈汎は、

「よ」

と言いつつ、椅子の前後を逆にし、背もたれに腕と胸をかぶせるように乗せて、喪令の真向かいに坐り、珍しそうに相手の顔を上下にじろじろ眺めた。

眺められた方は不愉快そうな眼でにらみ、

「何だ？ 奇天烈野郎」

しかし、そんなことにお構いなしに、にやにやしながら理愈汎は、

「おやおや、親友が来たつてのに、冷たいやつだな。三時の珈琲か。雨だから散歩もできないしな。カントなら出掛ける時間だぜ」

罌は白けた顔で隣に坐る。喪令は歎息し、

「俺はカントじゃない」

「わかってるさ」

「そんなこと知ってる」

「だろうね。何読んでる？」

「お前に関係ない」

「プラトンか。『饗宴シムポシオン（古希：Συμπόσιον）』だ。テストの初日は哲学だからな。次の問題は誰が作るんだったかな？」

「そんなことも知らないのか」

「公表されてるわけじゃないしな」

「推論は容易だ。隆臥たかふしに決まってる」

「あゝ、十月から来た外部講師か。平衛家だ。まだ二十歳、眞神大（眞神眞義塾大學）の学生だろ？ ぼんやりした男だ。手強いものか？」

まあ、うちの家系から見たら主君筋だがな」

「ふ。ぼんやりか。確かに渺茫あまやまことやとしている。だが、天易真兮の知遇だ。哲学となれば、油断はできないだろうな」

天易真兮はこの数年後に『人間存在の実存的分析による存在論考・「空」』を上梓し、眞神地方の眞神民族の伝統的精神を近代的に昇華し、大いに発展させ、眞神哲学の金字塔を打ち立てることとなる人物で、当時二十一歳であったが、既に数々の論文で名を馳せている。

色を変えて面白がるように理愈汎を横眼で見た。しかし、「ふん」と鼻を鳴らし、相変わらず喪令をからかうように、

「それでプラトンなのか？」

再び侮蔑の冷徹なまなざしに変わって、喪令は刺すように、

「来週までにタレス以降の東西の全哲学者・思想家の著作を読み込む予定だ」

タレス（古希：Θαλης 紀元前624年頃、紀元前546年頃）は記録に残る古代ギリシア最古の哲学者。エーゲ海のアナトリア半島にあったイオニア人の都市国家ミレトスの出身で、ミレト

ス派哲学の始祖。知り得る限り最古から、全部読もうという話だ。

「お前は超人だよ。普通、思わないぜ」

「この学生は皆、普通じゃない。民族の誇りだ」

本気でそう思うというよりは、自分をも含めた誰かへの、或る種の挑発であった。

「へー。お前は左翼だと思っていたよ」

そのとき、理愈汎は喪令が龍咒リウジユのことを畏敬の念を持って語っていたことがあったことを思い出していたのだ。

「別にどちらでもない」

天平龍咒は二つ上の先輩で、在学中、文化祭の卑俗さに反対し、作品展示のため、黒い紙を壁や天井一面に張った教室にバケツ二杯の真っ赤なペンキをぶちまけた。壁を（若干の上下をしながら）横一文字に走る赤い抽象画が、まるで天空を自在に遊弋する赤龍のようだったという。罅から見れば遠い親戚でもある。今は眞神大学にいた。神域という、これ以上はない舞台で、命を燃やすという死のパフォーマンスで、究竟の「炸裂」を生きた（表現した・演じた・行動した）彝之イタルの系譜を継ぐ者として眞神地方では理解されている。龍咒の二つ上であったイタルもまた、その当時は十七であった。

眞神の狂気を示す偶像。

三人の頭にそういう連想の雲が籠もり湧き、暗鬱なる無意識層の暴力性が甦るとき、突如、それを和らげる華が飛び込んできた。

「あ、先輩」

「よ、伊咄垂じゃないか」

理愈汎が咄嗟に反応する。

『うん、まばゆいな』

罅は一瞬、見惚れてしまう自分に気がついて、眼を伏せる。

「試験か」

「そうですよ。超難しくて」

「楽勝だろ、お前なら」

「もー、そんなことないです。適当なこと、言わないでください」

喪令は一度微笑を投げただけで、その後は本から眼を離さなかった。罅は余りに眼を逸らすのもわざとらしいと思い、敢えて面を上げ、理愈汎と伊咄垂の顔を交互に見ているかのように見えるようなふりをし、実はどこにも焦点を合わせずにいる。

「今日も勉強するのか、次の試験はいつだ」

「来週です。昨日も、この図書館で勉強したんですよ。ネットじゃ調べられないものが、まだまだたくさんありますからね」

「十時までやってるからな、ここ。でもよ、睡眠も大事だぜ。ちなみに、どうやって家に帰るんだよ。もう、バスないだろ、こんな田舎じゃ」

「父が迎えに来るんです。姉さんもここで勉強してるし」

「そうか。ダブル合格はありそうか」

「わかりませーん、姉さん、何も言わないから」

「だろうな。お前はどうかんだ。今までの試験がダメかどうかぐらい、何となくわかるだろ」

「全然ダメとは思わないけど、でも、わかんないですよ、だって、ここの試験は」

「哲学があるからな。」

「どんな問題だった？ もうやっただろ？ 初日はずだからな。学問の基礎、第一の学だからな、哲学は。」

混沌たる世界の闇を垂らすランタンだ」

その言葉で伊咄亜ははっと驚いた顔をし、少し黙った。

「どうした。思い出せないくらい難解な問題だったか？」

「いいえ、思い出したんです、ちよつと不思議だなって。何だか、大したことじゃないのに、胸騒ぎを感じたんです」

「おいおい、何が？ 何のことだよ」

「昨日の晩、帰るときに、車の中から見えたんです、真神高校の屋上のところ、電灯が皓々と点いていたなって。」

「それだけなんですけど」

「屋上のところって、あの出入りのためのフロアか。おかしいな。試験一週間前で、部活もないし、試験問題を作る教員なら、屋上の出入り口ではやらないだろ」

「当たり前だ。部活だってやらないだろうさ、理愈汎」

急に興味を示し、喪令が割り込んできた。

「見てみるか」

何の気もなさそうな表情で、罅が言った。

その顔からはナイーブさが消えている。すっかり獵犬のようになっていた。

第四章 曼荼羅魔法陣

喩呬亜は玲瓏で端正な横顔を哀しい旋律のように傾け、高校の図書館で勉強中である。霧のような雨が降ってはいるが、雲は薄く、まだ明るさのある時刻だ。十六時閉館なので、寄宿舎の図書館へ移動しようと考えていた。

寄宿生ではないが、二十一時までやっているその図書館を利用することはできる。

だったら、最初から二十二時まで開館している大図書館へ行けばよいのだが、妹がいるのがわかってるので、何となく行きたくないのだ。どうせ帰りが一緒なのは、わかっているのに。

別にプレッシャーも精神的負担もないが、神経質になっているので、少しでも無駄に疲労したくない、そういう気分だった。

閉館時間も近いので、彼女独りしかない。司書は司書室だった。
とても静か。

気味悪く感じた。なぜだろう。問うまでもなかった。何となく、妹が昨日言ったことが気になるのだ。大したことはないのに。ただ、屋上の出口のフロアに灯りが点いていたというだけのことだった。確かに大したことではない。でも、滅多に電気をつけない場所だった。ほとんどの学生が点灯したところを見たことがない。

でも、気になるようなことだろうか。気になるというよりも、今もする胸騒ぎのような感覚であった。何だろう、これ。本に向かって伏せていた顔を上げる。

いつの間にか、一人の男が立っていた。

「え？」

銀色の髪を靡かせる男。古典彫刻のようでありながら、幽愁を帯びた顔立ち。薄いロングコートが翻る。風もないのに。

彼女が驚いたのはそのせいだけではない。「あなたは」

校舎入口の鍵を閉められないうちに校舎に着こうと、罅と理兪汎と喪令と伊呬亜は雨降る中を急いだ。そんなとき、

「いよいよ、おそろいで何急いでるんだ」

こんなところで何をしていたのか、軽そうな口調で声を掛けてきた者がいる。遊歩道の大きな楠

の下だ。大きな傘を差している。眉を顰め、理兪汎が、

「何だ、リョーベン（陵幣牟）か。ここで何してたんだ」

あかか
赤門陵幣牟は罫らの同級生、〃リセ〃ではなく、普通科の生徒だ。

「おいおい、おいらで悪いか。樹に話し掛けていたのさ。へ、眞神流の哲学テスト対策だよ」

「そうか、勝手にしろ。悪いが少しばかり急いでいるんだ」

「勝手にするさ、当たり前だろ。しかし、何だよ、ちよっとおもしろそうだな、おいらも混ぜてくれよ、理兪汎」

「ふざけるな」

何かを感じて理兪汎は受け入れなかった。罫にも彼が感じているものがわかった。たぶん、目当ては伊咄亜で、もつと前からこちらの様子をうかがい、やや先回りしてあたかも（こんな不自然な場所ではあるが）偶然会ったかのように装っているのだろう、的な可能性を疑っているのだ。逆に言えば、理兪汎にも少しそういう気持ちがあるということだ。罫同様に。

だが、喪令はその空気を敢てスパッと切って、

「構わん。来たけりや来い。ただし、言つとくが、面白くないもなんともないからな。それから、説明はしない。自分の眼で見て好きに考えろ、頭があるならな」

「け、マジ面白そうだ」

すっかり服を湿らせて、五人になった罫らは昇降口にたどり着き、一階の廊下に入ったとき、伊咄亜と会う。

「あ」

「どうしたの、お姉ちゃん！」

伊咄亜は姉の表情にただならぬものを感じた。こんな時間に、こんな場所で会った驚きだけではない何かを。

罫も訊いた。

「どうしたんだ、蒼いぞ、顔」

しかし、伊咄亜は逡巡した。自分の見たものを言えば笑われるだろう。コスプレじゃないのか？で終わりだろう。

「い、いえ、何でもないわ」

リョーベンはへらへらしながら、

「そーかなあ、何か怪しいぜ」

どうやら彼の気持ちは二方にあるらしい。そう思う罫も人のことは言えないが。

喪令が、しかし、

「屋上が先だ」

「へー、屋上に行くんだ？」

リョーベンは猜疑の混ざった驚きのまなざしを投げた。理兪汎は『こいつは何を考えているのか、よくわからないが、信用できない』とさらに強く感じている。剽軽さがポーカーフェイスの代用になっている。

「屋上がどうしたの」

急にしっかりとした表情になり、凜としたまなざしで喩咽亜が訊いた。妹が今、巻き込まれている何かが気になっていたのだ。きっと昨日の晩の、あの話だ、と。

「ねえ、どういうことなの」

それについては、伊咽亜が説明した。

「お姉ちゃん、あれだよ、昨日の車の中で、あたしが指して言ったじゃん。お姉ちゃんは見えなかったみたいけど」

むろん、憶えてる。けれども、今、思い出したかのように、何でもないことのように澄まし顔して、

「あゝ、そう言えば、あったわね、そんなこと。それで様子を見に行くの？ バカバカしいわ」

「別に来なくていい。来てくれとは、誰も言っていないぜ」

喪令が言うと、それを急いで取り繕うようにリョーベンが、

「でも、来なよ、何か面白いものもあるかもしれないぜ」

薄暗くなり始めていた。雲が厚くなったせいだ。それしか原因は考えられなかった。なぜなら、季節は年で一番日の長いときだったからである。

生徒はほとんどいないはずであった。静かで粛としている。

「何か気味悪い感じ。電灯点ける？」

伊咽亜が訊いても、喪令は、「いや。気がつかれたくない」

「誰に？」

喩咽亜が咎めるように訊く。

「誰にでもだ。教員も生徒も、その他にも」

理兪汎が尋ねる。

「その他って、例えば、どんな相手を想定しているんだ」

そのとき、最上階を過ぎて屋上に達した。

「あ、こうなっているのか」

罫が声を上げる。

屋上に出るための出入口はその直前が小さな部屋になっていて、その部屋に入るためには、小さな鉄の扉を開けなければならなかった。

理兪汎は手をドアノブへ伸ばしながら、

「鍵が掛かっているかな」

喪令がニヒルの微笑し、

「普通なら、掛かっている。安全管理上、必ずそうするはずだ。俺たちにとっても、掛かっている方が危険だ」

罫もそう思った。

理兪汎が捻ると、ガチャリ。開いた。

「待て、理兪汎、気をつけろ」

だが、開けてしまった。

「バカ野郎、待てと言っただろ！」

「あ！」

明るい……、動悸が激しくなる。しかし、電灯は点いているが、誰もいなかった。

いつから点灯していたのだろうか。ここに来るまで気がつかなかったのは、角度的な問題と、何よりもまだ明るかったせいだろう。罫はそう納得した。その安堵も束の間。

「ウわっ、何だ、これ！」

理兪汎がうめく。

次に入った喪令も、「あゝ、これは」

「え、何だよ」 そう言いながら続く罫も。「んん！」

これは何だろう。床に円が五重に画かれ、五芒星が一番外側の円周に先端を合わせて、円を区切っていた。様々な意匠や文字や紋章や象徴や図形が精緻細密に画き込まれている。

「サンスクリットだ」

喪令がつぶやく。

「サンスクリット？ 五芒星が使っているの？」

理兪汎が素っ頓狂な声を上げた。

伊呷亜も恐る恐る顔だけ差し入れ、

「そうなんですか。何だか、魔法陣みたいに見えますけど？ ラテン語とか、ドルイドの文字とか

じゃないんですか」

喩呬亜は伊呬亜をどかして、罅の後ろに入って来る。

「サンスクリット文字だけじゃないわね。この文字は何？」

「どこかで見たことないか、それ」

リョーベンの声だ。彼は部屋に入らず、伊呬亜の後ろから、首を伸ばして覗き込みながら、言っているのであった。

「臆病な野郎だ」

理兪汎が大きな声で独り言つ。

「ふ。慎重なのさ。お前のように軽率じゃない」

「確かに見たことあるな」

罅が顎を撫でながら、言う。喪令が嘲るかのように、

「思ひ出さないのか。サイバー世界で使われている真言（神咒・陀羅尼）の文字だ」

理兪汎が手を打った。

「IEか」

伊呬亜も声を上げる。

「あー、ほんとだー」

喩呬亜が振り向き、

「伊呬亜、ゲームしてる時間があるなら勉強した方がいいんじゃないの」

伊呬亜は「しまった」という顔で舌を出し、

「はーい」

理兪汎は横眼で、

「そう言うお前も知っているのか。やらないタイプだと思ってたよ」

喩呬亜、少し頬を染めつつも、むっとした顔で、

「気分転換する権利ぐらいあるわ」

「ど」もつとも」

喪令は一同をガラリとにらみ、

「漫才やってる場合じゃない。」

この意味を説明すべきだろうな」

黒雲が広がり、風が強まる。

「きゃっ」

伊咄亜が身をすくめた。稲妻が光ったのだ。後からゴロゴロと大岩を天で転がすかのような音が轟く。

「予報どおりだな」

夕方から大気が不安定になるという予報だった。罫の言葉が合図であったかのように、やわい雨が土砂降りになった。

急に思いつき、どきりとした顔で、理兪汎が、

「おい、屋上は！ まさか誰かいないだろうな」

罫が動いた。

「見ればすぐわかる」

屋上への出入り口を性急に開けようとする罫の背後から喪令が、

「気をつけろよ」

だが、クレセント錠が掛かっていた。回し、開ける。雨の叩きつける屋上を、闇を透かすように見廻すも、誰もいなかった。

喪令が腕を組む。

「いつの時点かはわからないが、誰かがここに来て、扉を開けて、照明を点灯させたままにしたんだ。

この魔方阵はすぐに仕上げられるようなものじゃない。こんなに細かく精妙に作られているからな。昨日、今日の両日で書き上げられるかどうか」

理兪汎が喪令に尋ねた。

「意味は分かるか」

「いや」

間髪入れず、素っ気なく応える。

「だろうな」

理兪汎も冷たく相槌を打った。

第五章 ユリアス

誰かが階段を上ってくる。

「めんどくさいな」

喪令がつぶやく。

「どうするか」

罽が理愈汎に訊く。

「適当に言うさ」

彼らは誰も教員だと思っていた。しかし、違った。開いた扉の前に立った男は、

「やあ、君たち。」

思慮のない深入りは危険だぞ」

「え！」

六人が同時に声を上げた。

明るい銀髪の毛先を膝下や踝あたりで戦^{そよ}がせる男。風もないのに。それは立ち上るオーラのせいなのか。

ユリアスがそこに立っていた。

「信じられない」

リヨーベンがうめく。

「コスプレじゃないよな」

あ然としていた理愈汎がようやく声を出す。